

琉球大学学術リポジトリ

果菜類育苗の必要性 (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19795

る等のよい細菌の繁殖が多く、土をよくする腐根分の適量をもっており、肥料養分も作物にすれ易い形態で豊かに存在している。このような土をよい地力をもつてゐるといえるのです。それではこのよなよい土にするためにはどうすればよいのでしょうか。

地力を高めるには

一、耕耘……むかしから「肥より鍬」「七度すけば肥いらす」といわれておりますが、何回もたがやす程、土粒子の構造を图一のように團粒化し、また風化作用を促進して土の中にある有効養分を増加します。

又耕てんをして土の乾燥の状態を十分保つほど肥料分の有効化の度合が大きくなります。

普通土粒の状態は、土粒間のすきまが少なく水も空気もよく通れず、また植物が根をはるにも不便です。然しそく耕てんすると下図の團粒状となり、土粒間のすきまが沢山あって水も空気もよく通り植物が根をはるのにも便利です。

二、深耕……「土一寸、米一石」のたとえのよう、多肥と多取は深耕を伴ってはじめてかなえることが出来るので

す。ただし水持ちの悪い田や、心土の悪い畠地などでは、急激な深耕はさけるのがよい。それはますます水持ちを悪くするからです。次に心土の土は養分が稀薄である

から必ず堆肥を鋤き込むことが肝要であり、徐々に深耕する方が効果的です。

三、乾土……土を乾燥すると有効物が分解され、アンモニア化します。

乾土のききめは畑よりも水田、乾田よりも湿田が高く、冬期は特にききめがあります。沼や湖の底土をさらい乾燥して使うと効果の高いものです。

四、焼土……乾土効果をさらにつよく出したようなもので土の表面「一寸をけづり火をつけていふしやきにします。土の色が風乾した場合と同じ色になります。そうすると土の中のチソソが有効化すると同時にリンサンもきいてきます。然しながら沖縄のようにやせた土地(特に砂地)では

ききめが低いのでありますすめたものではありません。

五、客土……これは(一)土質改良(二)耕土の増加(三)肥料養分補給の三つの目的を主として行います。

(一)の場合は砂質(ウジマ土壌等)に埴質(ジャーガル土壌)又は泥炭土等という性質の違う土を客土した方が良い。

(二)の場合は、耕土に近い肥えた土が望ましいものであります。秋落田に客土をする場合は堆肥を併用した方が効果的であり又泥炭地等に客土した場合は肥料分が有効化して来ますのでチソソをやり過ぎないように注意致します。

六、排水……畑では地下水の位置が地表から概ね三尺以下がよく、高い場合はよくないといわれています。従って重粘土壌や泥炭地などでは特に排水することに注意すべきです。

排水後は地温が高まりチソソ成分が有効果しますから、それだけ作物によく利用される訳です。

七、酸性矯正……土壌の酸度を検定して石灰の適量を土とよくませることです。

酸度の検定や石灰の適量は村の普及員とよく相談致します。

一度酸度を矯正すればききめは数年保ちますが再び酸性になりますからたえず土壌の酸度に注意することが肝要です。

開拓地は一般に酸度が高いものです。

八、有機物施用……「山から下れば豊作」の例えもありますが、土地改良には有機物がどんな場合でも必ず必ず

堆肥や厩肥や綠肥等をうんと増産して地力を作り十穀、土精の両面をつねに活発にし土をつくることが増産の根本といわねばなりません。

(比嘉信吉)

果菜類育苗の必要性

(二)

三、果菜類の市場價格と

早熟栽培の利点

果菜類を早熟に収穫開始することは台風期までの収穫期間を長

くするだけではなく単価の高い時期に出荷することになり、この点でも有利な経営が出来る。

第一回から第七回までは農運市場における果菜類の斤当り卸價格の変動を示すもので細線は一九五五年六月上旬より一九五六年五月下旬までのものである。

八月以降の両年間の単価の差の大きいのは台風の関係で一九五五年には十月に一回あつただけで、果菜類に大した被害はなく、一九五六六年には八月に一回、九月に二回はげしい台風に見舞われ、なす、キウイ、二万レイシは殆んど全滅したと思われ金額的に果菜の過度不足を来し、残余の果菜類が激しく高騰したためである。

一般に十一月から五月までは果菜類の盛産期であるが、通常

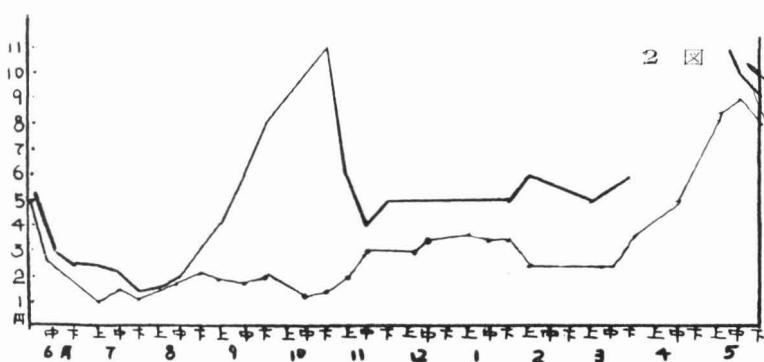
この期間に収穫されるものはトマトだけであり、きりり及びビ

ーマンの抑制及び半促成の栽培では冬期間若干保溫して有利な

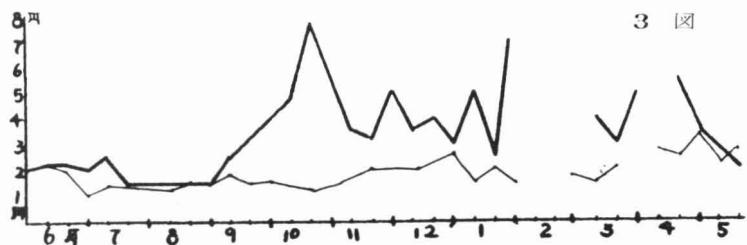
経営が出来ると思われるが、他の果菜類ではこの期間まで収穫

をのばしても有利とは思えない。

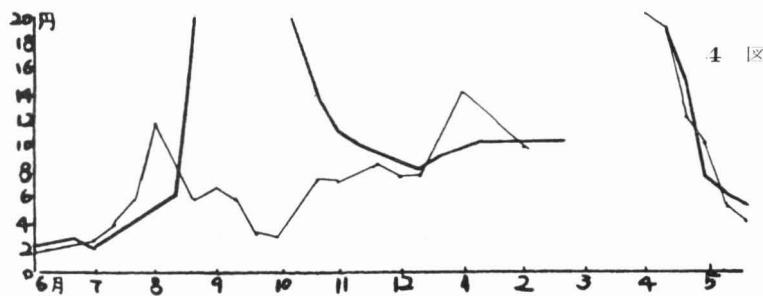
然しこの期間における之等の果菜の需要は僅かであり、最も
重要なことは果菜類を早熟栽培により四月か五月の品薄期で単
価の高い時期に収穫出荷する緑栽培法を改善することである。
かくすることにより、六月に果菜類が市場にはんらんして単価



2 図



3 図



4 図

四、琉球の気温と温床育苗の必要性

が激しく下落することを防ぐのである。

然らばいかなる方法で寒冷期に育苗して早期出荷するかを考

察しよう。果菜類の発芽温度は高い方が良く、30°C前後を

目標とする。発芽が延長し、不適なれば良好な育苗は極めて

困難となる。発芽後各果菜のいわゆる育苗適温に移すが、之は

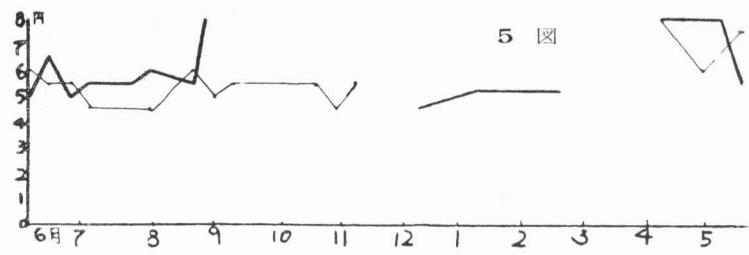
第三表に記してある。ヘチマなどは天体ナスに準ずる

表 第一表
那覇の気象
統計年は1910年—1940年である。
1881—1890地温1924—1938日照時数1906—1836
暴風日数

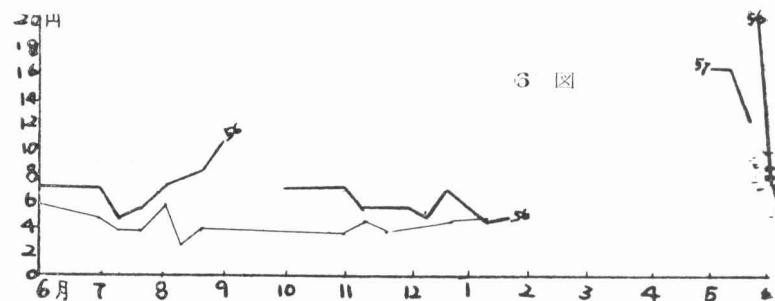
温度・C	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温	○C	16.1	16.0	17.7	20.7	23.1	26.1	27.9	27.7	26.6	23.9	20.8	17.7	22.0
平均最高気温	夕	19.3	19.1	20.8	23.9	26.3	29.2	31.2	30.9	29.9	27.2	24.0	20.9	25.2
平均最低気温	夕	13.1	13.1	14.7	17.7	20.3	23.6	25.1	25.0	23.9	21.0	18.0	14.8	18.2
地温	夕	15.7	16.1	17.8	21.9	25.5	28.3	30.8	30.2	28.3	24.4	20.3	17.2	23.0
地中温度 (0.5 M)	○C	18.2	17.7	18.5	20.7	24.1	26.5	29.1	29.3	28.7	26.3	23.0	20.1	23.5
日照時数		108.1	98.0	124.0	150.1	162	196	276	24.7	216	178	134	118	2008
暴風日数	10m/s	14	13	11	6	5	3	4	6	7	10	12	13	104
降水量	mm	131	130	161	157	253	269	188	266	183	164	134	105	2142

種類	生温育適
トマト	22-24℃
ナス	24-27
とうが	22-28
かほちや	20-22
きうり	22-24
すいか	22-28
しろうり	20-22
メロン	30-32
ピーマン	22-27

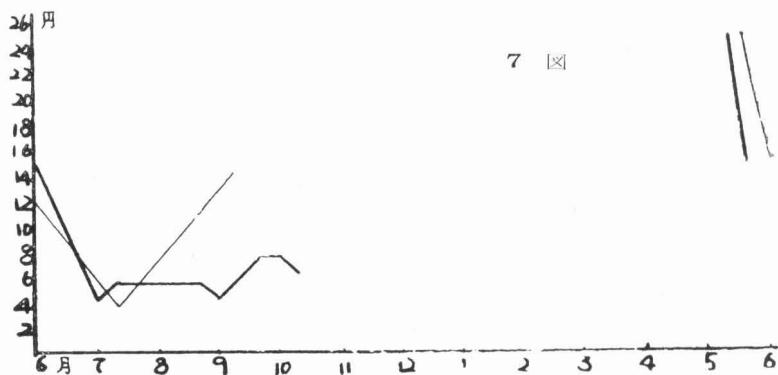
と考えられる。次に琉球気象台統計資料による琉球の気温は第三表の通りである。



5 図



6 図



7 図

第三表
果菜類の生育適温

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計年
地区														
宮 古	17.7	17.9	19.4	21.4	25.5	26.7	27.7	27.4	27.0	24.8	22.3	19.4	23.0	1938-1955
八重山	18.0	17.8	18.7	22.2	24.8	27.1	28.2	27.9	26.9	24.1	22.0	19.4	23.2	1897-1950
南大東島	17.6	17.8	19.1	20.8	23.8	26.1	27.8	27.7	27.5	25.2	22.6	18.6	23.0	1847-1955

第四表 琉球各地の平均気温

以上の表から那覇の気温は
筆者が琉大農学ビルの近くで
低温では発芽、生育の悪いナ
士一二、二、三月にかけて
は果菜類の生育にはやや低温
に過ぎ、他地区においても完
分とは言えない。
ト製の鉢九個次の通り三群と
三組に分けて準備した。(こ
のようなセメント製の小温床
は気温が激しく上下するへい
がいはある。)

ス及びヘチマを使って試験し
た育苗結果は次の通りである
先ず幅一・五尺、長さ一・
四尺、高さ一・五尺のセメント
鉢九個次の通り三群と
三組に分けて準備した。(こ
のようなセメント製の小温床
は気温が激しく上下するへい
がいはある。)

区子障無(3) 区子障(2) び及子障(1) 組			群
G	D	A	1 発熱区
H	E	B	2 適床土処理区
I	F	C	3 無

(1) 発生区、稻わら九束(平均1150匁)に対し疏安反当り四匁を混入し、一月一五日みこむ、

(2) 床土絶縁区
床土を入れる前に稻わら一束をしきつめ日中床土に吸収され、太陽熱が床土下に移行するのを防ぐようにした。

(3) 無処理区
土の上に直接床土を置いた。

組

(1) 障子及び蓋区(まごも)

日中は床内気温が30度以上になつた時ガラス硝子を取外し、午後五時から午前八時半までカマス一枚上からおうて保温に努めるようにした。

(2) 硝子区

日中は前組と同様な管理をした。

(3) 無硝子区

日中は前組と同様な管理をした。(つづく) (友寄長重)



コナガによつて全滅した大根 (1956年豊見城において)

コナガとハイマダラノメイガ

この二種はダイコン、カンラン、カブその他の十字花科作物を加害する重要な害虫である。

コナガ

一、虫の形 成虫は体長約6粂、はねの開張一四粂内外の小さい蛾で、全体灰かつ色を呈し、前はねの後縁に波状の黄白紋がある。卵は扁平で凸形、白色半透明

幼虫は体長約9粂頭部は淡かつ色、胸脚は緑色を呈する。蛹は体長約6粂、黄緑色一淡かつ色を呈する。

二、加害状況 年数回発生し、幼虫は葉裏で葉

肉を食害する。そのため葉は葉脈と表皮が残り、被害の著しい時は地面上部は完全に枯死する。特に三月頃は発生が多いので注意を要する。

三、防除法 DDT水和剤(10)の六〇〇一八

〇〇倍液を作り、当初反当四一五斗を撒布する。その後作物の生長に伴い五斗一石を約一週間適時に三回位撒布する。

DDTが得られない時はひ酸鉛又はデリス剤を撒布すれば良い。

ハイマダラノメイガ

普通ダイコンシンクイムあるいは単にシンクイムシといつてゐるのはこの害虫の幼虫である。

一、虫の形 成虫は体長約7粂、はねの開張一四

粂内外の小さい蛾で、全体灰かつ色を呈し、前はねに淡色波状の二横線と黒色の腎状紋があり後はねは灰白色を